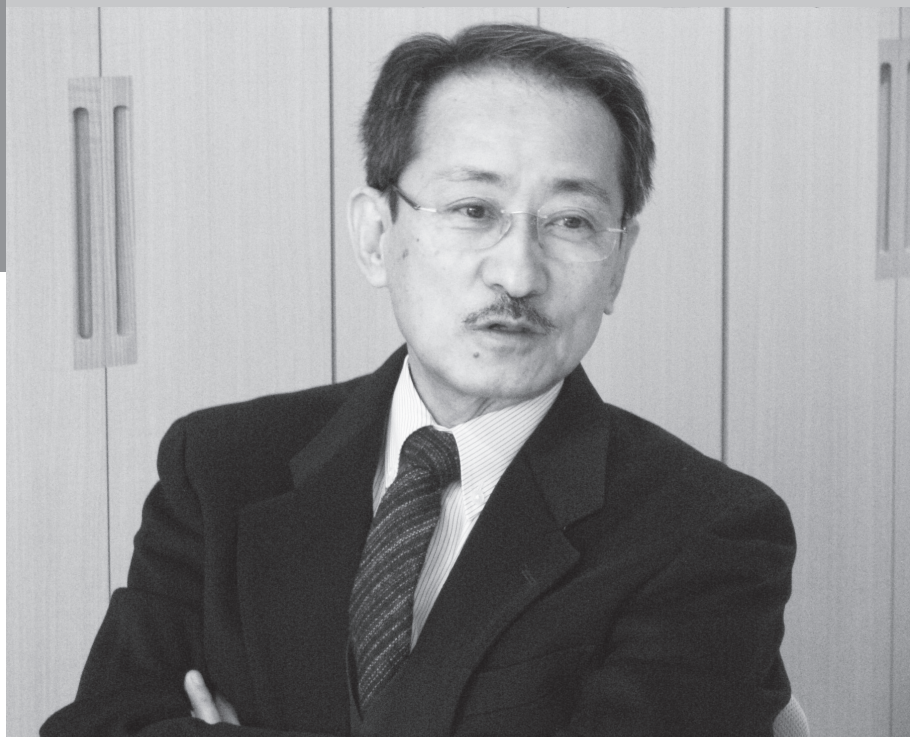


INTERVIEW

東通地域医療センター センター長
川原田 恒先生



地域のつながりの中で、 人として教える

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

気持ちは外科医から総合医へ

山田隆司(聞き手) 今日は東通村に川原田 恒先生をお訪ねし、5年前に完成した研修棟でインタビューをさせていただくことになりました。先生はもうここで15年間地域に根差した医療サービスの提供に務められてきたわけですが、まずは先生のご経歴をお話いただけますか。

川原田 恒 私が自治医科大学を卒業したのは昭和57年、5期生です。初期研修は青森県立中央病院で受けましたが、私たち1桁期生が研修を受けたところというのは、医局が非常に強くて、医局に入らない者の研修の受け入れに慣れていない状況でした。

山田 当時は地元の大学も旧態依然という感じだったのですね。

川原田 そうですね。ですからそういう医局に対し

て少しネガティブな印象を持っていました。その中で技術を身に付けたいと思って研修を受けた外科の教室の雰囲気がとても良かったのですね。もちろん当時ですから、いわゆる地域医療の研修はない時代です。卒業生がようやく地域に赴任した時ですから、私たちにとって地域医療の将来など全く見えなかった時です。それで7年目の後期研修に外科を選びました。1年間、とても楽しかったですね。

山田 2年の初期研修の後はどこに行かれたのですか。

川原田 4年間は公立野辺地病院の外科などに行きました。

山田 7年目の後期研修は県立中央病院ですか。

川原田 はい。その前に少し千歳平診療所と百石病

院へも行きましたが、県立中央病院で外科研修を受けて、外科が面白くて仕方なかったので、8年目にも外科ができるところを当然希望したのです。ところが県の人事でもう1回診療所へ行くことになり市浦診療所という津軽半島の端っこにあるところへ行きました。人口は3～4千人ぐらいだったと思います。外科がやりたかったので傷心の気持ちでした。

山田 外科医にとってはそうでしょうね。

川原田 それでもとにかく外科は続けたいので、県立中央病院の月2回の研修は絶対行かせてほしいという条件で行ったのです。

ところがそれが自分にとって景色が変わった時です。どんなふうに変ったかと言いますと、患者さんの質も非常によく、村の雰囲気もとてもいいところだったので、「あれっ？」と思った感じですね。それから大部分が慢性疾患の患者さんたちですから外科はあまり役に立たない。ちょっと外科の限界のようなものを感じました。

一番大きな契機となったのは、保育所の5歳のお子さんの溺水事故です。連絡が入ったのが夕方の4時。スタッフ全員で川べりへ飛んでいき、挿管、蘇生措置を開始しました。30～40分後、心拍再開したので後方病院へ救急車で搬送しました。残念ながら亡くなってしまいました。

その時心配して50～60人の村人たちが土手にずらっと駆けつけたのです。それを見て私は初めて「コミュニティ」というものを感じました。そのつながりですね。それが大きかったです。今から思えば、ある意味、その子が自分の命をかけて私に教えてくれたというか……そんな気がしています。

山田 50人ぐらいの視線を一身に浴びて、自分が命を救えるかどうか、本当に医師として真剣になる時ですね。

川原田 外科や麻酔の研修をしていたので挿管など

の技術があつてよかったと思いました。さらに心配して駆けつけてきてくれた、というそのつながりに思うところがありました。

それを契機に自分で県内の溺水事故を調査したのです。そうしたらお子さんの溺水は、当時田んぼが多かったのでいわゆる堰や水路が多いのです。時間的には夕方まで。子どもですから夜は出かせません。ということで、やはり診療所クラスでも救命救急の処置は絶対必要なのだらうなと考えました。さらに予防も大事だということで、保母や養護教諭、保健師たちを対象に勉強会を開いたのです。その勉強会は今でいうところの地域志向アプローチです。地域診断しながら地域の課題を解決するという。今から思えばそういうことだったのだらうなと。

山田 自分が逃げられない、切羽詰まった状況で、真正面に受け止めて対応したということが、先生の方向性を変えるきっかけとなったのです。

川原田 その1年間でいろいろなことが重なったのだと思いますが、ちょうどその頃に自治医大で第1回 総合医学術集會が開かれたのです。当時、「総合医」という言葉さえ初めて知ったという全く知らない世界でしたから、パネリストのお話を聞いて目からウロコでした。「保健師たちと組んで面白いことをやっているなあ。こんな世界があるんだ」と思い、その講演を聴いた後、いわゆるヒーロー映画を見て自分がヒーローになったように感じるという、そんな高揚感があつたのを覚えています。

山田 総合医学術集會で、みんなが同じような経験を共有して、それがつながり出したのです。

川原田 まるで雨後の筈のように「全国でやっているんだ」という印象でした。その時に医局に入らなかったのです。なりと総合医の方向に行けたような気がします。